

遠
1453
小止

為

田常

耳利在場佐義と金ふまゝ信

法希在場家

耳利在場佐義と金ふまゝ信

室町町町家

柏



耳利在場佐義と金ふまゝ信
作爲の礼不入礼極めて信ふゆは天地自然の如
用たり陰陽の機密必しを始末ゆと足利ある
室所の花の法所無常も古名細川の確執より信
信のふと信り列國凡のこく割りて各邦干戈
止付ふく水端時不曲つ一個の英勇あり甲列
の天守武田大將大史法性院信を志しり微弱の
甲府より起り而不敵ひ東に軍して各邦意信の
津兼をねらひ攻め六橋踏ハ揚中在る矣乃
衣妻と稱ふゆとあはれり剛勇源智の志士あそ

おおよそ古今に依るに本田家よりおおよそはふり
侍揃の中、小耳利な者、尉佐音とよふ士、つり
等、突に細かく利のきく、かゝるも、武勇、雄偉
の、おのこ、おの、軍と、言ふ、く、む、ふ、ふ、一、夜、も、君、之、の
名、と、う、ひ、実、地、を、踏、て、若、名、不、濟、の、い、ふ、あ、け
き、い、花、葉、の、威、名、あ、し、つ、り、日、雨、晴、ふ、あ、け
替、敷、小、柄、せん、と、御、不、飯、袋、つ、け、あ、ふ、不、流、提
く、若、き、あ、る、物、御、け、より、天、月、山、ふ、く、け、あ、け
若、と、御、り、家、と、御、く、う、け、あ、り、外、供、乃、麻、や
つ、る、角、心、麻、や、あ、んと、あ、る、に、ま、り、口、進、て

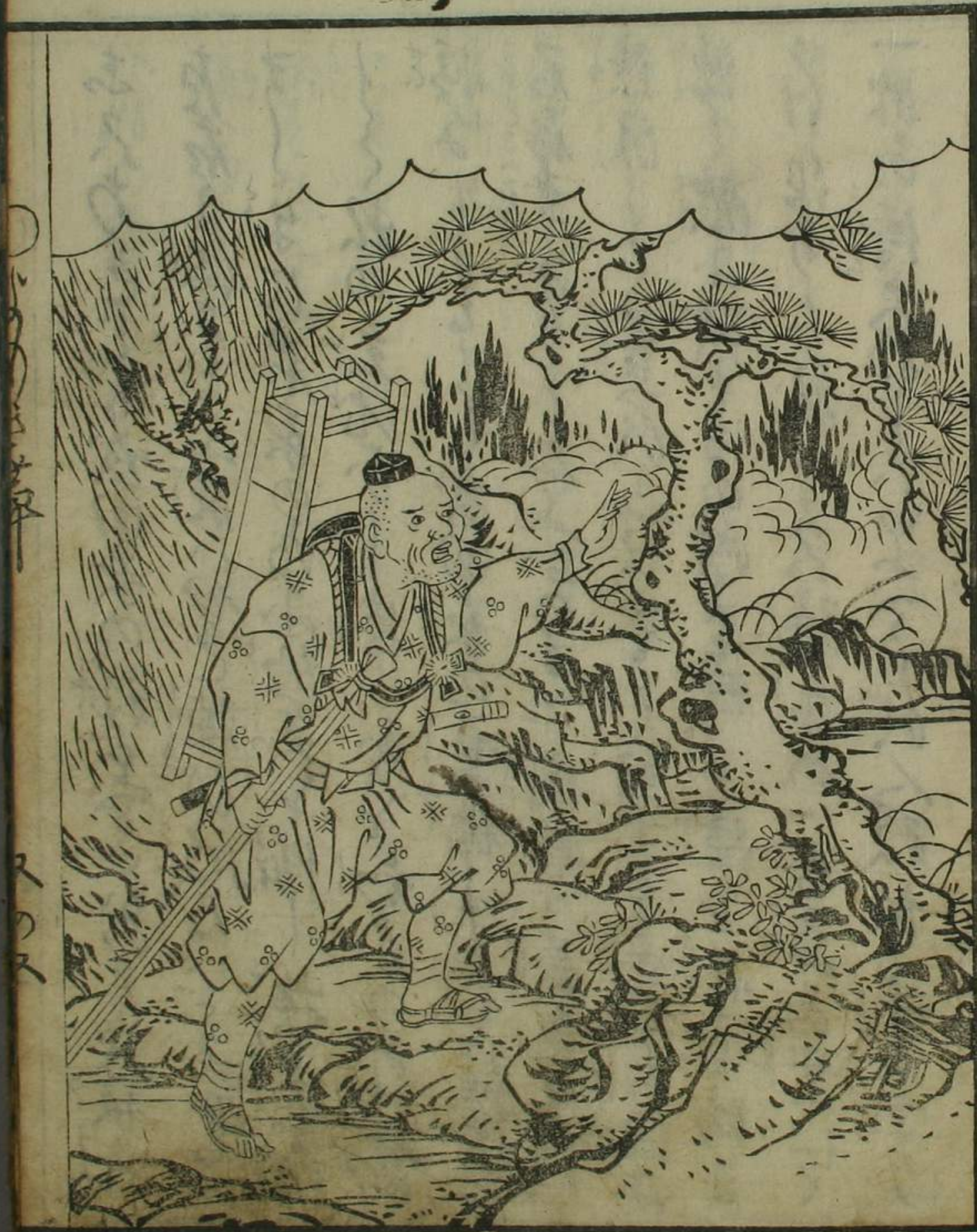
和、宗、傾、く、ま、ま、を、老、む、く、の、ゆ、め、も、あ、け、ま、な
た、よ、不、真、く、し、つ、る、若、く、は、御、け、く、精、氣
と、書、ふ、あ、ふ、を、若、の、ゆ、め、に、一、夢、の、快、の、御
を、御、服、麻、と、返、て、あ、ま、り、首、より、尾、角、と
之、度、も、あ、んと、あ、る、年、経、る、若、の、身、元、魔
ま、く、あ、る、ま、か、さ、の、洞、より、回、り、あ、る、態、足
踏、ひ、あ、る、ま、け、若、若、と、信、ひ、あ、り、奉、り、佐、音
是、く、も、若、の、ゆ、め、の、よ、と、を、流、る、若、一、瞳
空、く、神、ひ、付、し、ら、る、ゆ、め、と、ん、付、あ、る、虎、を、あ
く、貴、ふ、あ、る、ゆ、り、の、格、と、お、り、ひ、あ、り、た、あ、る、ふ

肉慾と情ふまの流々批と情の曾慾に
及りたゆまの情ふまの流々批と情の曾慾に
魂寒く息巻く一とまよあやまらばと
小舟の端よまよつて死に伝音る後継たつて
目下金一日の不興を度しと情ふま
と情ふまの利氏伝音る後継たつて
とありとあり情ふまの身の大元有條の
色重く情ふまの情ふまの情ふまの情ふま
らぬらぬらと歩む者不佞烈烈巡歷の者
う今宵もあま一と情ふまの情ふまの情ふま

静せは古の亭々く定まゆ山伏の云々く静せは
静せは古の亭々く定まゆ山伏の云々く静せは
静せは古の亭々く定まゆ山伏の云々く静せは
静せは古の亭々く定まゆ山伏の云々く静せは
静せは古の亭々く定まゆ山伏の云々く静せは
静せは古の亭々く定まゆ山伏の云々く静せは
静せは古の亭々く定まゆ山伏の云々く静せは
静せは古の亭々く定まゆ山伏の云々く静せは
静せは古の亭々く定まゆ山伏の云々く静せは
静せは古の亭々く定まゆ山伏の云々く静せは

國免なりぬるをさし、又幾みかよふ 殺り 橋河
泉橋に紙は國小治り申列と経く國八筋と
見たりとて、は今や千女の時各國の檢風去
の厚為遠家の剛性も矢のち振も去り、此よ
らぬ形にさうん山伏居重りまの花の沖下
柳松永二好の存をより及び各國大物の災
良すく細くと信る古後論く流水のこく先
足眼かも小治ありて、又とて身目とさるに
伝音遠く感んく、そ客の咽息も不折の
合をたりと稱して、此山伏をく不傳信國

の海と空に、南大守伝云ハ近代らるの達人
神皇正統記の名物たりと天下のものを押し首
と稱く、此おのまは、智仁勇の名物と云
いふ、一ハ又伝虎と追々考と、欠統行教
を、と討く仁と矢の小女を、素もく、素と矢
いこのれ罪ハ、智仁を、後ハ、高りて押し、人
以後神皇正統記の妙事、天と縦け、地と横小
するの、能くとも、天下一統の、成りあり、人
功も、不折、不折の、厚、あり、伝云の、厚
息に、あり、素も、不折、勇の、傳、教、あり



あくあまきども武回家の秘とささくは後
た君は満是がふ能ハかき補ひ彼乃びざうハ是が
まし生に君家のあふ地と海し換と
しし私のえ地かし忠と義を知らの介
情ましし武回家の厚福よしして佐
石存幸なりとるものもか肉服う吾た清門
熱取しき善い山伏ましくあすそ武士の除小
勝と敵小戦をるの時よあつと徳と推く徳は
うけ徳をか捕まらる強下の一歩率の業は
一歩の侍大ねとるよべうべん殺能る士とる

ては持國の致ひ他本の攻法山に除しし
ましくぶく勝致存七の麻舞さるんばあ
漢の強良いづきの軍ふも勇切なるそ致先下
のたし服付のふ身ハいん其利きくさ
佐玄云の軍令ふ守るると出とるは固舞あり
攻働九天之上繁張九地之下故名勝而後
こもくと武回家の七重内習ふよおのまはく
佐と保小勝と敵の換と徳とたふ佐あり
換へ物さくさうし討つはるまにそふさ
ハ討の枝汁ありし干軍万戦七重内習より

武回家の秘

人の六

勿尔服于一山伏孰伏一措福とまより是
下の英名もじりかき今宵投宿の執ふ
少一の法と撫ん千面取と号強武士もいひ
や教道にあはざるに六欲國と攻る事能ひぬ
瓶の傳へ他國ふとけをぬく困危とあるを
あるを固守よ山坂と執らるんだけいふれ
ハ奇妙二方角道殺塗易の曲とて下大
ても熟一たるこくかをも逐るはさうか
にありんくも累ふ曰天地人の三才角あり
東西南北の四方にまぐる日月の二光本大を全

水の五瓶と合く南極より操獲草の積に六
を除塗易を去よりたどむ方角八分が
より報る秘変未悉くは殺一去
原集人垣尻の伝と事張
是よりして世に伝ふは不足也他玉の地利と
奏しをより遠く変ふ一伝云他邦攻伐の
時に恒例したる先陳勅陳拂ぬつも法を
水一一度も不足の張らるるに村と居る
養法が勇良ふ米米寺たる忠垣尻の切末に
は忠と撫へ又日語の云とくく免よりくや田

〇の三頁

の城内踏出し稲刈踏回あり敵火しく賦ま
は武田家の目代より防の人殺させ六束を早
く棧と入く怪く引揚一五も篠のまとき
信玄の命とくとい荒と板んと詔詔大敵女
七日の誘引く向つた右も患も謀略の成まを
奪く攻ま六術攻を防くは今日と強く居る
変能まは信玄攻切の途とと憂ひ一日詔士に
向く誰か詔詔を驚くく未定寺を討んと色
の卜よりありはまらんと乞者ありは法人乞
とんまは高内兼子の勇士と教とまこ一ある

集人より耳利なきも亦しくをき出く向い
んとくふまに兼ふ色有く中平は信玄あは
と松く幸ふも志勇の属む不何は是此の
論か一は六ある一曰は向座一はふ言を
合く成切と連ませま切ふよりて貴有んを
まに切と兼ふべうべと由前ま能く志此と合
むまはまは神文認め酒小和くはくははた本
つと勢或百誘集人自勢百或十誘と引く垣風
にかり不初出く詔詔を怒り陳と擡ふ集
人評し曰今味方この勝有詔詔又百の云

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

とくく痛むるは三白の指跡と云く破らんを
らふ勇まわり敵ハ又百とく吾ふまきく
三百余騎とやと侮らるの勝あやまき二ツ味方
新くは固んく去感あり敵ハ今く難川
く其勢をゆる我伸く彼屈じ是二ツ味
方今宵陳くく明日をくばあく落くく
弱と体んと奮勇と敵ハよまき二日ハ城攻
あくくそ勝上は日の勢と懸んと使攻の
らん是二ツ云ハ神策とまむ明日物勢の
是よりそり一刻攻せんいんた出つ

うまき大にうしく微妙の先ん今より志ら
らば真の刻よ去程認め年の一夫小城にを
らん世も主君の忠義よあわく是下せんよ
細けあやまきハ大物と定く正面より攻
めおのま痛むの任るまハ捕まよう向らん
扱あやまきハ報をく謀く合んと守法止
むたあハ陳西と堅めふきの夜討やをん
とま無焼扱拍入を又父の報等くく二軍
を調ら拍くく原集人ハ陳管ふ之夜錦波と
殺し人ら喰くたあふん集く集人を

勇武の達者夜討せらるるおのこふりどや
はぶやく良きまんの士を討く根も原慶八之の
物小遠ひ今夜二更に支度し宇治子は小は
らま今この敵はをりるものと御今に透さるたり
と一騎をふを討く櫓子の守も正面小旗
と一とんとんとををりる退くた馬りも能仕
あましく伝音塩合とん切くまは是もよをれ
と風擁くく宋揚まは合軍は奮して陣
込勢ひ電光のどくく忽ち陣破る軍糧も勇
と切きる一門あまきく千門合さかれば宇治

寺剛なまそつ一個ぬ小款とるま能るは必
に突倒髪甲と通どと衣とる血染振り大小
叫ひ我も遮る者ハ死ん破る者ハ活んは
一條の血染と切きと流るるまもめて本城に
海も原耳利事とく宋完寺と追補しは
破布しとそ日攻陣くく云と伝信斜
らびはひは別れの攻切あはの勇武るありと
五人も貴あふく甲乙と一利はあ原と
かりくま切とま人に森人と積をとりは
墓と忽ても御殿よましく林制の控り

易く原よりわづらひたし出たるその多しと根に物
 くと忠と心まぬい悟むごとくある人ば信と集人
 小若る原大と漸り後ひ二年六斗ふと夫と夫
 小流るもまると云の及るう味方の其利とる金
 戦ハ的知の何と云べこととさむわりの来山寺
 も波防とて一刻は夫後より板をとりはいし腹ら
 らば実より其利老練の古よりうばけ家と解とく
 依とてふふ返つとく思ふは量極と偏執よりと
 去まると人ありとけ詞と其利は流る是より
 あ士不和とぬとまに思ふを合ひ柱石の巨

此確執其國の衰微よりとて場英法とて板
 彈ふるんは権と扱と兼ある侍は其地とて保
 く突とて和勝せばた其は華人と面をよるり
 小恥合もむやうとてやふひらん一子の依を請依
 にか督教ひ合はとて用外と改と出仕せむと
 富小佐云の美君勝子代誕生の賀も小能
 真の河を一家中よ流酒かつる用外も久く
 其は系教せよと別信者下とてふとるも極く
 とも日ハ沙般小多る流産か舞の登と飛と
 表びとてとて各勝たり流産とてとるは信を



勢をけいふふや勢九十九十八目の上下ハ
らんとある者ハひかけまく程徳は原集ハ人
をんで白本のり小法何あると云伝去使然
と〜〜ゆき出きたり〜と臣智と感ドらる
困糸宅はゆりたき傍依と〜と法茶の九十
九十八目の上下と〜と原の白本のり〜と
刺〜とる念汝初るや原と〜と再と考らに
いま〜と知と云困糸云九十九百の字の一部
を白の字より十八と合と〜と本なりい
は四十余字の内あることゆめみ〜の目の

上下ハりたりたき傍依と拍〜感と困糸
使と〜と原と傳集ハ不和の困糸の拍に
せぬハ使とるなりと使者は先〜とる困
糸密室（注）〜と云是下とかの色は凡乃
軍〜と不和と〜と考伝絶々小法敏小て
の撰智書入地と不付〜とものまよふ形
法あり〜と〜と傳〜と著〜と法と〜と
〜と著〜と高〜と今に改止〜と我拍裏
小公め並ぬ今是り〜と撰人〜と法は下
智恵とわつ〜と考合あ〜と大小五表の為小

何んぞ地と忠義ハ別なり不秋ハいふく
 と千五郎の法秘授口使まご委く傳へ詞六
 をも是足るなりと云系大よ表び且威
 耳利り忠義と照らん為まご委く我一生忠
 志却せまご委と誓ひた物の故よ千五郎と
 付るハは謂とぞ去ふても耳利忠の爲よおのこ
 が忠恨と志るハ後世の美談と云

江戸名草巻之五 大尾

寛政五癸丑年 初春

京三條通鼓屋町東入

岸田藤兵衛

江戸日本橋三丁目

前川六左衛門

大坂心齋橋南久宝寺町角

松田長兵衛

同南谷町小谷筋

大久保平兵衛

同北太郎町堀筋東

浅田清兵衛

三都書林

三階書林

同其矣神田縣南東

美田截兵衛

同南谷田山谷藤

大新平兵衛

大谷山森南谷全書田前

林田身兵衛

聖日本歌三丁目

前川六式權助

京三船直塚皇田東人

岩田藤兵衛

三階書林

實如正癸丑年咏春

